

せたかむい

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 42-12590
第117号・平成11年6月1日

年表で読む

古平の歴史

《25》

■種田徳之丞が場所請負人

古平郡では、場所請負制廃止の通達が出る前の慶応二年、種田徳之丞らがそれまで古平場所請負人であった岡田家から、古平・その他の場所の権利をすでに譲り受けていて、場所請負制の廃止が通達された明治二年、種田徳之丞の請負場所の運上金は次のようでした。

江納・室蘭場所	二六両三分
幌別場所	五四両三分
古平場所	三八一四両一分
なお、古平周辺のほかの場所の運上金を見てもみると、	
余市場所	二八六九両二分
美国	一四一五両三分
積丹	一六六六両三分
岩内	一九七五両一分
寿都	五八三両

忍路場所 二二五九両三分

高島 一五四八両

古平では、鯨漁の記録としてはつきり残っているのは明治二〇年からですが、その他の生産額も合わせて、古平場所は、岡田家の繁栄を支えた第一の場所だったことがうかがわれます。

■場所廃止の延期を嘆願

明治という新しい時代になり、漁場の権利を独占する場所請負制はまったく時代に合わないものでしたが、彼らはすでに来年用の生活物資の仕込みや、東北地方からの漁夫の雇い入れを契約していました。

「これは大変」と、請負人一同は連名で嘆願書を出しました。「私どもは、すでに来年の仕込みとして米・塩・みそはもちろ

ん漁具なども、夏中にみな注文を済ませ発送済みの品物もあります。明後年についても品物によつては注文済みであります。

また、漁夫についても南部・津軽・秋田辺りの者へは前金も渡して約束済みであります。それにアイヌの者たちや奉公人も、ここで働き生活をしております。このようなことから、私どもも廃止には困惑しております。」

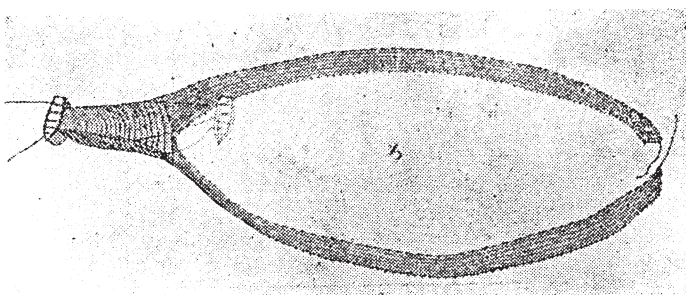
まあなんとか急に廃止するようなことはしないで、仕事が続けられるお願いしますということです。

■官庁が漁場を管轄

嘆願もあり、急に廃止するということにはやや問題もあったので、請負人は当分漁場持ということにしました。開拓使は、古平を含めた西部の旧請負人に対し、請負制を廃止し、官庁が漁場を管轄することについて次のような通達を出したのです。「北海道は土地が肥沃であるのに漁業にだけ力をいれ、また周辺には外国船なども近づいて来ていて、朝廷ではこのことを大変憂慮している。このような事

態であり、請負人一家の富ばかりを図っているような時節ではない。これからは住民、アイヌの取扱いについてはすべて本庁からの指図をうけ、漁業も直接支配するので心得違いのないよう。やがてこの地も大いに繁盛するようになるので、目前の小利益を欲しがらず、後の繁栄を楽しむに家業に精を出すこと」

明治時代より前に使われていたざる網
(騒音がすると鯨が逃げ出すといわれている)



大正五年

8/30 欧州での戦争で魚網

会社は輸出に忙しく、年内の注文は受けられないなどと威張っている。従って値段の方も去年より上がった。

9/4 朝からの雨が、昼ころから暴風に変わった。車軸を流す雨というのはこういう雨なのだろう。

9/5 昨日の暴風雨はひどかった。農園ではサクランボ三本、桃一本が根元から折れたとのこと。リングも落ち、三〇〇斤ほど(約一八〇キ)拾って持って来た。悪い年である。午後から晴れてきたが海は大時化、古英丸も避難しているのか湾内に見えない。

9/12 イカ漁が皆無なので店は閑散としている。

9/20 網の客がポツポツ来る。一時ころから美国へ行って、他店の売り行き模様を見て来ることにした。④に寄っていろいろと話を聞く。夕飯をご馳走になり、ちようちんを借りて七時ころ美国を出

る。道路が良くなったので歩くのも楽だ。九時に家に着く。

9/21 正隆寺で稲荷祭りがあるといので花火が上がる。

9/22 今晩二時ころ、地震のようにミシツミシツと二階が鳴る。暴風だ。寝てもいられない。朝になっていろいろ聞くと、至るところで屋根を取られたり、木が倒れたりしたという。積丹方面では、イカ漁に出た川崎船が三隻行方

高野名幸作さんの日記から



【18】

不明だという。

9/23 馬車にひかれて、固大工さんの二歳の男の子がけがをしたというので見舞いに行く。今春は鯨漁が良かったので、刺網の注文がポツポツ入る。

9/24 天高く馬肥ゆるとは今日、このごろの天候のことだ。リングが豊作の年なら今ごろ農園は見事だが、今年はさっぱり張り合いがない。

9/25 イカ漁がないのでさびしい。今年の春は刺網が大漁だったので、来年は刺網をやるとい人随分多い。この分だと早く手回ししないといけない。

9/26 入船町の大謀関係の資材が大分売れた。今日まで四〇〇円以上になる。今日も綿ロープ、綿糸が売れた。綿ロープが暴騰して、去年九〇銭だったものが一元五〇銭

にもなった。

9/28 このごろは毎日のように刺網の照会があり、今日も三千間ほしいと来る。そのほかにも三百間売れた。店は何といつても勉強が第一、品揃いを豊富にし薄利多売主義がよい。積丹・美国方面からの客も多いので、十月中ごろから美国方面へ出店すること

も考えている。寒いのでたびを履き、半天を着る。

9/30 積丹岳に雪が積もって白く見える。今年は雪の早い年のようだ。

10/3 新聞によれば、小樽ではコレラ患者が出たというので大騒ぎとのこと。

10/4 六時に起床、自転車に乗って新開町から正隆寺の坂の上に出る。辺りの眺望もよろしいが、朝風に吹かれて自転車で走るのは気持ちがいい。畑通りに新道が出来てこの方面も実に開けた。

10/5 秋の衛生検査が近づき、天気が良いのでこの家でも大掃除にかかっている。家でも座敷の畳を出して叩いたり、店の商品なども外に出して掃除をする。

10/6 快晴で小春日和のようだ。浜に出て見たが上なぎで、帰りに新開町の新道を見たがりつばに出来た。

10/7 積丹岳がすっかり白くなり、朝夕の寒気も身にしみるようになった。今日から店の方にもこたつをかけた。

—— 続く ——

北海道では最も氣候のよい新緑の六月を迎えました。今では体験した人も少なくなつてしまいましたが、鯨漁の盛んだったころは鯨製品の出荷も始まり、漁場では来年に向けて漁の後始末もそろそろ終わるころです。

北海道具では最も氣候のよい新緑の六月を迎えました。今では体験した人も少なくなつてしまいましたが、鯨漁の盛んだったころは鯨製品の出荷も始まり、漁場では来年に向けて漁の後始末もそろそろ終わるころです。

記録で見る北海道の鯨漁

つた漁期の過ぎた古平の町はまた寂しくなります。

五月の半ばも過ぎると、鯨は樺太（サハリン）からオホーツク海沿岸で獲れ出して、今度は古平周辺からは出稼ぎの人たちが多くなります。

数年前から、かつては石狩湾一帯の鯨の大漁に沸いた留萌・増毛方面で鯨が獲れだし、今年は鯨の群来（ぐんらい）が見られたというので大きな話題になり、大勢の観光客が押しかけたといえます。浜の人たちの興奮した喜びが新聞紙上ににぎわし、来年へ

かける期待が大変なものであることも伝えていきます。

古い記録では今から五五〇年ほど前から鯨漁が始まり、そのころは樹木の皮から作ったたも網で鯨をすくい獲っていたそうですが、それでも相当の漁獲があったと思われます。産物では鯨・蛙・昆布が蝦夷地の三品といわれていましたが、なんと

つても鯨がその代表でした。早くから開けた松前や江差ではこの鯨漁が発達し、「江差の春は江戸にもない」といわれ、その繁栄ぶりが想像されます。ようやく蝦夷地のことに江戸の人たちが興味をもつようになると、蝦夷地を紹介する本も出版されるようになりました。

人子どもまでも上下一同にこの業にかかることにて、田作の秋も異なることなし」

身分の上下も老若男女の別もなく、豊作の秋を迎えた時のような忙しさである、と言っています。

また、それから二〇年ほど後に、同じように古河古松軒という人が『東遊雜記』に書いています。（意味が伝えられるように書きなおしてみました）

「蝦夷や松前の人たちは、鯨で一年中の生活の万事をまかなう収入を得るので、鯨の来るころになると武士や町民、漁師の区別がなく、医師や神主、坊さんにいたるまで家を空き家にし、それぞれ浜に仮りの家を建てて、人に負けまいと鯨を獲ることに熱中する。男は海上で働き、女や子どもは鯨を割いて数の子をつくる。また、元氣な者たちは一〇人から一五人が集まって、奥地の方へ鯨を獲りに行く。このために、松前では本州方面での農作物の豊凶などはまったく関係なく、鯨の多く来る年を豊年といい、鯨の少ない年

を凶年といっている。」

この中で、「鯨漁の舟の数は二万あるいは二万五千艘」と書いています。

また、同じ時代のこのほかの本にも、

「鯨を買い歩いたり、浜辺に落ちてゐる鯨を拾つて歩いてる女の人でも八、九両の金を得る人がいる」

「佐渡や越後の方から知人を頼つて来て借家を借り、一生懸命働いて、わずか三か月ほどの間に三〇両から四〇両の金を国へ持ち帰る人もいる」

《神威岬での鯨漁の図》



ふるさと
歳時記

人の世の峠はるかに
亡き妻に捧げる

(4)

吉川 義雄

宿命に抗う街ぞ灯のにじむ

「男は仕事だ。」一つ覚えの受け売りの言葉が、何の力もないことが私の人生に次第に証明されはじめていた。

どんな理由をつけても仕事は手段であり、目的そのものでは決してなかった。

家族の幸福がその目的であり、仕事はその価値を生む手段であつたと思ひ知らされるまでには、長い年月を必要とした。

もちろん、仕事を通じて良質の価値を社会に提供すれば、当然わが家にもその恩恵は増幅して還元される。

物の少なかつた戦後、私が最初に就職した編機の卸会社は、折からのブームに乗って売れに売れた。しかしそれも、もう大丈夫と、家族を古平から呼んだ

頃から怪しい雲行きとなり、満を持して機会を狙っていた、大資本の創つた優秀な編機の前に、オモチャみたいなものになり、会社はあえなく倒産した。

自分の好きな仕事でもあり、あわてて飛び込んだ図案会社で、何を気に入られたのか一年ほどで副社長にさせられ、再びわが家に平安が戻つて来たかに見えた。

古平を離れたあたりから、私の運命は速度を増し、抗し難い力で私を翻弄(ほんごう)し始めていたように思える。

倒産した前の会社に、よかれと思つて私を入れてくれた先輩が、「申し訳なかつた」と、あれ以来、懸命に別の職場に私を売り込んでくれていたらしい。図案会社で、すでに地歩を築いていた私は、今さら職場を替

える気はなかつたが、「私の顔だけ立てさせてくれ」と、果ては社長にまで頼むに及んで、面接だけでもと、舌打ちしながら指定のグランドホテルに向ひた。

人生とは皮肉なものである。採用されたくないばかりに、好きなだけたわごとを並べて帰つて来たはずが、二次試験で東京の本社まで来てほしいと、旅費までついた通知が来た。

関心がまるで無いから知るはずがなかつたが、神田神保町にある広告代理店博報堂は業界の名門、私を威圧する莊重な建物が田舎者をギクリとさせた。

雲流る堀の芝生でも思う

本来、大学出でもこの会社に入るのは至難といわれ、ましてや小学校しか出ていない者が、夢にも向かつてゆける職場ではなかつたようだ。この時点、それでも私は憶する必要は何もなかつたから、社長も重役達もただの人であり、その前で自分の全部を平気でさらけ出した。

札幌に帰つてヤレヤレと思つていたところ、破格の待遇での採用通知が追つかけて来た。札幌で私を面接した副社長から添え書きがあり、「当社に、こんな人間が一人くらいいてくれるのもいいだろう」との、社長の言葉で決まつたとあり、私も同感だとあつた。

私を手離したくない図案会社の社長は、ことの成り行きに驚きながらも、なぐさめたり、祝福してくれたりした。

好転を始めたと思つていたわが家に、今度は思わぬ暗雲がたれ始めていた。妻の身体の異変である。古平にいた頃も、時に忙しくなると身体が妙に黄ばんで倒れ、医者は疲れだけと言つていたが、私が博報堂に正式に入社した頃から、得体の知れない病魔に彼女は襲われていた。

—— 続く ——



遙かなる故郷の思い出

[56]

わが闘病生活 ⑤

橘 義 春

トイレで倒れたとき、背中でトイレのドアを押したため体重でドアの内鍵が壊れ、その後ろ向きに廊下の方へ飛び出して倒れたらしい。すごい物音だったので、それで家内と長男が気づいたということである。家内の話だと、私はそのとき大きないびきをかいていたそうだ。

私は若いときから低血圧だったので、そのせいで貧血でも起きたのかと勝手に判断していた。私は会社を定年退職してからは健康を考えて、中高年だけで組織している山岳会に入会した。本州のどこへ行くにも、観光も兼ねて貸し切りの観光バスで、南の方は神戸や京都、奈良の山と、古都の神社仏閣はほとんど見て回った。北の方は山形や秋田辺りまで行き、千メートル級の冬山を登ったりして、体

力には大分自信がついていた。

テレビ東京の番組で、日曜日の午前中に老人を対象にした健康講座があった。その中に、私に思い当たる項目がたくさんあった。そして、ひよっとしたら私には心臓病の不整脈のケがあるのではないか、と思うようになった。

突然、こんなこともあった。

それは夏の暑い日であった。用事があって、家内と二人で自転車で出かけることになったが、自転車置き場で家内が鍵を忘れたことに気づいて、鍵を取りに家に戻った。私は歩道の上に自転車置いてまたがり、家内の方を待っていた。そのとき、急に頭がフアーとなったまでは覚えていたが、そのあとは全くわからない。見ていた人の話では、歩道から一五センチほ

ど低い車道へ、頭から自転車もろとも崩れるように倒れていったそうだ。

気がついたときは、近所の奥さん方四人が私の回りを取り囲み大騒ぎをしていた。幸い大きなけがはなかったが、頭の横にはこぶがで、右のひざの皮がむけ、右手の指二本も負傷していた。単なる低血圧や貧血ではないような気がしてきた。もし路上を走っていて倒れていたなら、東京は車の通行が多いから、車にひかれてイチコロになるところだった。

ともかく、循環器の専門医のところへ行つて相談してみようと思つていたら、ちょうど近くのJRの駅の近くに、くろだ病院という専門の病院があった。初めての病院だったので、まずどのように話をしようかと考えた。自分の現在の体調のおかしいと思うところを箇条書きにして、それをくろだ先生に提出したら先生が判断してくれるだろう、これは我ながらよい考えであった。

私は何十年も日記をつけてい

るので、その中から拾い書きを試みた。

1. トイレで失神二回。
2. 夜、体の左側を下にして寝ると、心臓の鼓動がドキンドキンと聞こえてくる。鼓動が不規則だったり、途中でとぎれたりする。
3. 安眠ができない。目覚めが早い。午前二時ころになると目が覚め、寝不足になる。
4. 寝汗をかく。
5. 就寝中に両足がこぶらがえりを起こす。(度々)
6. 真冬でも、寝ると足首から先に熱くなり、ふとんの外に足を出さないと、足がほてって寝られない。
7. 昔は冷え性で靴下をはいて寝ていた。
8. 胸やけをする。(胸やけの薬を飲んでも治らない)
9. 右の首筋が、急に息を吹きかけられたように熱くなることもある。
10. 耳鳴り(ジーンと一週間に二回ぐらい)
11. 朝のウォーキングで、顔が

←(次ページ下段へ続く)

エジコ

竹内コト



むかしの人は、生活の中にいろいろな知恵を働かせて生きてきました。

ご飯を炊くとき、今は何気なく使っている炊飯器ですが、ご飯を炊くというのも大変な仕事でした。長く保温しておくことが出来ませんから、一日に一回か二回はご飯を炊きますが、火加減が大事ですからかまどのそばをあまり離れられません。寒くなってくると朝炊いたご飯も昼ごろには冷えてしまうので、おひつにとったご飯に、さぶとんや古い毛布や古着類などをかぶせたりしたものです。

こんなときに使って便利なものに「エジコ」という、わらで作ったものがあります。名前はいろいろあるようですが、古平では「エンツコ」とか「エンチク」などよんでいました。このエジコはおわんをうんと大きくしたような形で、忙しい

ときには赤ん坊を入れて一人で置くのに使われたりしました。その時は下にわらやボロ切れを敷いたり、エジコと赤ん坊のすき間にも布切れを詰めたりしたものです。

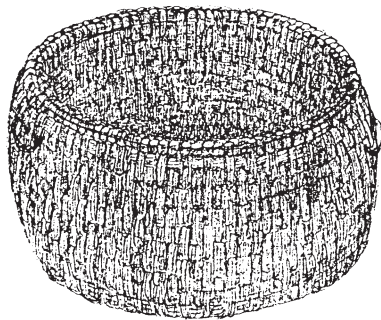
むかしは子どもの数も多かったし、親も忙しかったので子どもを育てるにも便利な道具でした。なんでも東北地方と北海道で使われているものだそうです。が、ご飯を保温するときには、わらで作ったふたを上にかぶせていました。

ご飯などの保温に使ったり赤

ん坊を育てるのに使われたり、本当に便利なものを考えたものです。

今の人たちは便利な文化生活になれてしまつて、心のこもつた昔の生活を考えてみることもないようです。

赤ん坊を入れたり、保温の道具としても使われた「エジコ」



◆豊年踊りの写真と録音テープ

浜町打越春子さんから、昔懐かしい泥の木《豊年踊り》の写真の寄贈と、囃子の《録音テープ》をお貸しいただきましてありがとうございます。

◆荷揚場建設工事の写真

服部忠司さんから、港町海岸一帯の工事の写真二枚の寄贈と、そのほか六枚の写真をお借りして複写させていただきます。共にご好意に感謝しお礼を申し上げます。

(前ページ下段より続く)

ファアとなり、ふらふらと立ちくらみがする。

12. 駅の階段の昇りで息切れし、ふらふらになる。

13. 自転車にまたがり、そのまま失神して倒れた。

恐る恐る、くろだ先生に二三項目の体の異状を書き込んで提出したら、先生から「私の病院に来る患者の皆さんにも、このくらい病気に對して関心をもってもらえたら——」と、おほめの言葉をいただいた。

早速、先生が心電図をとって見たところ、その結果は不整脈で私の予想通りであった。

私が深刻な顔をしていたせいか先生は、「不整脈ですが、今のところあまり心配しなくても大丈夫ですから、毎月一回、心電図をとりに来てください。」と言われた。

これで、やれやれといったところだが、ときは平成八年一月九日、くろだ先生と共に私と疫病神との長い闘いのゴングが鳴った。

旅の無事を祈りながら

渡辺 ハツエ

去年の夏に息子の家族が嫁のお産でわが家に来て、無事出産の大役を果たし、滞在八十日間、再会を約束して帰って行きました。私もそれなりに姑としての役割を済ませた気持ちで満足しておりました。

滞在中は親族の皆様の暖かい心に触れ、特に姪の朋ちゃんの私の孫に接する様子は、目の中に入れても痛くないという言葉そのものようでした。自分が中学生や高校生時代の思い出として残しておきたいような記念の品々を、惜し気もなく孫に与えてくれました。私が冗談まじりに、「朋ちゃん、あなたの赤ちゃんに上げるのにとっておきなさいよ」などと言ったことがあります。朋ちゃんはただ笑っていました。

「またお正月に古平へ行くよ」とのこと。一瞬、私は自分の耳を疑いました。幼い二人の子どもを連れての冬の旅ですから、いくら立派なフェリーでも冬の海の航海です。それに陸上では慣れない雪道、私たちはずいぶんと心配しました。船がしけに遭わないように、車が吹雪に遭わないよう祈りました。

そんな私たちの心配をよそに、息子たちは十二月二十七日新潟発のフェリーに乗り、二十八日にはわが家に着きました。幸いにも好天に恵まれて助かり安堵しました。朋ちゃんは、孫との再会を心から喜んでくれました。そして、お正月中はいろいろとお世話になり、かわいい洋服も買ってもらいました。祖母の私もしてやれなかったことです。

「朋ちゃん、どうもありがとう

ね。」感謝しています。

滞在十日間は、あつという間に過ぎてしまいました。なんだかんだと日数が足りなくて、お粗末なお別れパーティーで皆さんには申し訳なく思っています。

孫はまだ二歳十か月、去年の夏からお正月にかけての親戚の皆さんとの触れ合いを、心に残すようなことは到底出来ないでしょうが仕方ありません。

一月七日、この日もお天道様は、息子一家の帰りを祝福してくれてるような好天に恵まれました。

これは、私の心の興奮するような、去年の夏からお正月にかけてのわが家の出来事でした。

ね。」感謝しています。

▼先月の116号から、タイトルをロゴラインUという書体に変えましたが、鮮明で見やすいという声がありました。

▼昔の古平のこんなことを伝えたい——という話題がありましたらお知らせください。

▼前にもお願いしましたが、行事や町の風景などの写真がありましたらお貸しください。複写をしてお返しします。

▼タラ釣りのことを調べています。前に浜町の松田清さんから「昔は、大きなタラだと船のダンプルから上げられなかった」ということを聞きました。



石井 愛子

春待てばすずらん匂う楚々として
竹トンボ子供の頃に戻りたい
言葉とは角がたったり笑ったり

渡辺 ハツエ

老い独りお出かけ今日も鍵重荷
春の使者昔金魚屋今竿屋
お値頃は貧に縁なきコマーシャル

古平ホトトギス会

余生とは嫌いな言葉畑打つ 斉藤波留
 ぼっこりと土盛りあげし福寿草 山口悦子
 水温む橋下の水面に鯉の口 越野敏雄
 隣よりぼた餅届く春の宵 大和田絵伊
 人の世の囀りもある町議選 福井幸平
 荷にならぬ程の小蓑を摘む試歩に 仲谷美砂

古平町岬組歌会五月詠草

菅原節子
 アマリリスの花芽の茎は太ぶとと緑清やかに高く伸び立つ
 長崎フユ
 木蓮の花びら一枚ひろひ来て鏡の前でそっと囁んでみたり
 東美和
 春疾風に押されて帰る日暮れ時わが家の灯りぼっかり点る
 池田テル
 境内を埋め咲けるや花の下に先生を囲みてたのしかりにき
 竹内コト
 境内の枯れ葉を寄せて摘む三ツ葉手にやわらかく春の香放つ

厩小屋の出入りはげしきつばくらめ 大島喜恵
 火渡りの所作の変らぬ猿田彦 関口勝志
 片栗や人の通わぬ水源地 よしざき
 留守家の庭の桜のまだ蕾 山口浪
 利休忌や象牙の茶杓求めけり 仲谷比呂子
 花の絵に目移りのする種袋 仲谷安代
 声見ゆる野球場の閑古鳥 室谷弘子
 病床の窓を飛び交ふ燕め 岩瀬みのる

鈴木時子

いか塩辛まとめて買ふにいさば屋さん控へ食べよとやさしき言葉
 丹後初江
 我が町の六十匹の鯉のぼりけさは海向きさかな呼ぶがに
 榊佳代
 夕づきて選挙の連呼しばし止み夕餉の時か静けさ戻る
 奥山きよみ
 繰り返し鳴るサイレンに呼応して犬は長啼く大火記念日
 堀典子
 峰々に残雪見えて鯉のぼり古平川原の寒き風のむ
 山口スエ
 朝夕をもとほる境内の桜花の下みつ葉が萌えてたのしみひとつ